

[歴代理事長]

谷本 清 1950年～1986年(1950.8. 8就任)
鶴 襄 1986年～2002年(1986.4. 1就任)
橋本 榮一 2002年～2005年(2002.9. 7就任)
鶴 衛 2005年～ (2005.4.26就任)

[現役員・評議員]

理事長 鶴 衛
理事 谷本 建
理事長 田武久
理事 鈴木俊哉
理事 高林真澄
監事 寺越慎一
監事 酒井朋子
監事 木村義將
評議員 近藤紘子
評議員 湊賢一
評議員 若林誠
評議員 福原之織
評議員 玉田康莊



HIROSHIMA PEACE CENTER NEWS

ヒロシマ・ピース・センターだより

2021年 No.28

特 別 号



特別号は一部編集してご紹介しています。

紙面は当時のままです。現在では適切でない表現を含む場合がありますが、歴史的な資料としてそのまま掲載しています。

公益財団法人ヒロシマ・ピース・センター
〒731-5193 広島市佐伯区三宅2-1-1 広島工業大学内
TEL(082)921-4149 FAX(082)921-6979

公益財団法人 ヒロシマ・ピース・センター

CONTENTS

理事長ごあいさつ	1
ヒロシマ・ピース・センターのおいたち・谷本清平和賞と世界平和弁論大会について	2
谷本清牧師の略歴	3
谷本清牧師の足跡（原爆までの日々・原爆投下の時）	4
谷本清牧師の足跡（第1回目の渡米）	5
谷本清牧師の足跡（「原爆の乙女」の治療）	6
谷本清牧師の足跡（晩年の谷本清）	7
谷本清平和賞について	8
谷本清平和賞受賞者・団体（第1回～第5回）	9
谷本清平和賞受賞者・団体（第6回～第10回）	10
谷本清平和賞受賞者・団体（第11回～第15回）	11
谷本清平和賞受賞者・団体（第16回～第20回）	12
谷本清平和賞受賞者・団体（第21回～第25回）	13
谷本清平和賞受賞者・団体（第26回～第30回）	14
谷本清平和賞受賞者・団体（第31回～第32回）	15
世界平和弁論大会について・世界平和弁論大会最優秀賞受賞者	16
ヒロシマ・ピース・センター設立の趣意	17

ごあいさつ

公益財団法人 ヒロシマ・ピース・センター
理事長 鶴 衛



昨年来、世界中で猛威を振るう新型コロナウイルス感染症は社会生活において大きな影響を及ぼしました。本財団の活動も様々な制約を受けておりますが、本年も「谷本清平和賞」の贈呈式を迎えることができました。これもひとえに関係各位のご支援、ご協力があったこそと、あらためまして感謝申し上げます。

「谷本清平和賞」は本財団の創立者である谷本清氏の偉業を称え、財団二代目理事長の鶴襄氏が創設しました。第33回目となる本年度の「谷本清平和賞」は、NGOピースボート共同代表で核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)国際運営委員の川崎哲氏に贈呈いたします。

川崎氏は、核廃絶プロジェクトを中心に、日本から世界へ広げる「平和」のためのさまざまな活動をされています。とりわけ被爆者の声を世界に届ける活動に注力されており、広島・長崎の被爆者の方々と船で世界を回る「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」(おりづるプロジェクト)を開始され、被害の証言を世界各地に伝えられました。こうした取り組みの積み重ねが国際世論を動かし、核兵器禁止条約の成立と発効、ICANのノーベル平和賞受賞にも寄与しました。また、全ての国が核兵器禁止条約に加わるよう現在も精力的に行動を続けておられます。

なお、例年、贈呈式と併せて開催しています外国人留学生による日本語の「世界平和弁論大会」は、新型コロナウイルス感染症蔓延により、留学生の来日等が困難となり、誠に残念ですが、昨年到现在まで中止といたします。一日も早く世界中の感染症が終息し、今まで通りの平和で安寧な日常が戻ることを祈念しております。

そこで、本年度は「被爆ヴァイオリン」と「被爆ピアノ」を奏でる平和コンサートを開催することにしました。被爆で傷だらけになりながらも奇跡的に残り、修復された二つの楽器の音色は「戦争の恐ろしさ」と「平和」の大切さを私たちに教えてくれる「証言」といえます。その音色を通して「平和」について考える機会になればと切に願っております。

今日、被爆体験者の平均年齢が年々高齢化し、被爆体験の風化が懸念されています。本財団も1950年に設立した後、すでに71年が経過し、現財団関係者も殆どが戦後生まれの世代となりました。核兵器や戦争のない「恒久平和」の実現に向けて「次世代へ如何に継承していくか」が課題となっています。

本年度の「ヒロシマ・ピース・センターだより」は、谷本清平和賞選考基準の前文に述べている「現代に生きるわれわれの責務は、核兵器絶滅と世界平和実現を求めて小さなことでも自分がなしうることを果たし、またこのことを次の世代へ継承」の一つとして、本財団のおいたち、そして谷本清氏の足跡とこれまでの「谷本清平和賞」受賞者等を紹介した特別号として編集しました。本だよりが「継承の礎」の一助となれば幸いです。

本財団は、これからも時代の要請に基づいた平和活動推進に、微力ながらも尽力していく所存です。今後とも皆様のご支援ご協力をよろしく願いたします。



財団創立者
谷本 清
(1909～1986)

ヒロシマ・ピース・センターのおいたち

本財団が創立された基本的精神は、原爆をうけた広島に生存者が尊い生命を犠牲にした人々を思い、世界人類に対して恒久平和を念願することこそ広島に負った責務であるという信念に基づいています。被爆直後、悲嘆にくれた広島に現状を視察して被爆者を取材し、核兵器に対する憤りと被爆者への愛といたわりで綴ったアメリカ従軍記者ジョン・ハーシー氏による名著「ヒロシマ」によって、被爆地広島への関心は広がり高まりをみせました。

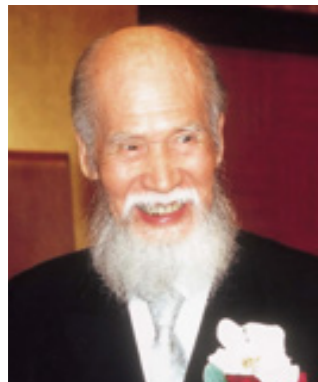
こうした時の1948年、谷本清氏(元:日本基督教団広島流川教会牧師)は、メソジスト教会ミッション・ボードの招きを受け、原爆による被爆者の体験をもってアメリカを歴訪。1回目の渡米では15カ月の間31州、256都市、472団体において“被爆の惨状と平和の尊さ”を訴えました。

「ヒロシマ・ピース・センター」という名前は、この訴えに呼応して被爆地広島で平和への活動が生れ、アメリカに継承され、広く世界平和の運動を推進する母体として1950(昭和25)年8月8日、財団法人として認可されました。谷本清氏は、本財団創立以来理事長を務め、再三にわたってアメリカに渡り、原爆乙女の治療をはじめ精神養子縁組等の事業を実現し、国内外で“恒久平和の実現と人類の福祉増進”を図ってきました。



谷本清牧師の略歴

- 1909(明治42)年 6月27日、香川県坂出市で誕生
- 1928(昭和3)年 香川県立坂出商業在学中に受洗、同校を卒業
- 1934(昭和9)年 関西学院大学神学部を卒業
- 1937(昭和12)年 アメリカ留学
- 1940(昭和15)年 ジョージア州アトランタのエモリー大学大学院修了
- 1941(昭和16)年 日本キリスト教団設立後に那覇中央教会に赴任
- 1943(昭和18)年 日本キリスト教団広島流川教会の牧師に就任
- 1945(昭和20)年 8月6日、爆心地から約3kmの己斐で被爆
- 1946(昭和21)年 6月、ジョン・ハーシーから取材を受ける
- 1948(昭和23)年 第1回目の渡米。9月から1950年1月までの15カ月間にわたり31州256都市を訪問、582回の講演を行う
- 1950(昭和25)年 8月8日、財団法人ヒロシマ・ピース・センターが設立許可される。9月から1951年7月までの8カ月間にわたり、アメリカの24州201都市を訪問、295回の講演を行う
- 1955(昭和30)年 5月5日、原爆乙女25人の治療のためアメリカに出発。26州195都市を訪問、245回の講演を行う
- 1966(昭和41)年 アメリカ・オレゴン州ルイス・アンド・クラーク大学より名誉神学博士の称号を授与される
- 1969(昭和43)年 広島市制80周年記念祝典で、世界平和と国際文化交流の表彰を受ける
- 1982(昭和57)年 広島流川教会牧師を退任、名誉牧師の称号を受ける
- 1986(昭和61)年 9月28日に永眠
12月、アメリカ・ジョージア州アトランタのエモリー大学より名誉神学博士の称号を授与。式典にジミー・カーター元大統領も参列
- 1987(昭和62)年 ヒロシマ・ピース・センターによって谷本清平和賞が設立される



谷本清平和賞
世界平和弁論大会
創設者
鶴 襄
(1915～2006)

谷本清平和賞と世界平和弁論大会

1986年に谷本清氏の後を受けた二代目理事長鶴襄氏(学校法人鶴学園創立者)は、谷本清氏の偉業を称え、恒久平和実現と原爆体験の風化を食い止めるために貢献した人(団体)を顕彰し、より一層平和構築への推進力となっていたことを願い、「谷本清平和賞」を創設しました。1987年ノーマン・カズンズ氏の第1回受賞をはじめ昨年の「アーサー・ビナード」氏の受賞まで32回の表彰をしてきました。

また、鶴襄氏は、若人たちが世界平和に対する関心を高め、国境を越えて平和実現のために手をつないでほしいとの願いから、1990年に第1回「世界平和弁論大会」を開催しました。こうした鶴襄氏の遺志は、谷本清平和賞と世界平和弁論大会を「国際平和の集い」として、本財団の基幹事業として今日まで受け継がれています。

原爆までの日々

谷本清が生まれたのは、香川県坂出市だった。1909年のことだ。18歳で受洗。関西学院大学神学部を卒業後、アメリカのエモリー大学大学院で神学を修めた。ハリウッドの日本人独立教会で牧師を務めた後、太平洋戦争が勃発した1941年に帰国した。当時としては異色の経歴で、沖縄の那覇中央教会に牧師として赴任した。

翌年の1942年、山崎チサと結婚したが、戦況は悪化の一途をたどっていた。「沖縄は大変危険な状況になってきたので、広島に行って少し体を休めるように」。新婚だった谷本夫妻への配慮だった。この言葉を受け、1943年4月に、広島流川教会の牧師に就任した。

1944年11月には、谷本夫妻の長女として絃子が生まれた。「絃」の一文字に、力ではなく友情で世界が一つになればよいとの意味を込めた。谷本にとっては軍国主義の「八紘一宇」の「絃」ではなく、反戦平和の象徴だったという。

広島での生活は、当初は決して居心地のよいものではなかった。深刻な食糧難に加えて、閉鎖的な市民感情もあった。「アメリカのスパイ」との噂も流れた。その疑いを晴らすために、谷本は積極的に地域に溶け込む努力を続けた。

原爆投下の時

1945年7月まで、広島は町は空襲を受けていなかったが、多くの人は被害を予期し、人や荷物を疎開させる作業を進めていた。谷本も教会の記録や備品を郊外の己斐町(現・西区)の知人の屋敷に疎開させていた。妻子は、牛田(現・東区)で寝るようにしていた。

広島市への原子爆弾投下があった8月6日、谷本は友人の荷物を同じ屋敷に運ぶ手伝いをしていて、目的地に着いて庭先で休んでいた谷本は、閃光を感じた直後、とっさに庭石の陰に隠れた。市街から立ち上る雲を見た谷本は、爆風でつぶれた家を後にして、教会があり妻子がいる市街中心に向かった。

市の中心部に近づくと、至るところで家が倒壊し火災が発生していた。北に大きく迂回してから太田川を泳いで渡り、川沿いに走っていくと、赤ん坊を抱いて逃げる妻に出くわした。避難所に指定されていた泉邸(現・縮景園)にたどり着いた。けがや火傷を負った人が多く逃げてきていた。谷本は水を欲しがると洗面器で水を与え、舟で泉邸から少しづつ人が対岸に移した。他の元気な人たちとともに防火に努めた。焼け跡の防空壕から米を持ち出し、居合わせた女の人たちに渡して炊き出しを頼んだ。

谷本は8月10日まで泉邸で負傷者の救護にあたった。戦争が終わったあと、8月下旬から急に体調を崩して高熱を発し1カ月間、牛田の友人宅で寝たままになった。その後、香川県の実家に戻りようやく回復した。

第1回目の渡米

1946年6月、谷本は著名なジャーナリストのジョン・ハーシーからインタビューを受けた。インタビューを受けたのは原爆に遭った6人である。ハーシーのルポ『ヒロシマ』は、当初、雑誌『ザ・ニュー Yorker』にて4回に分け連載される予定であったが、雑誌まるごと「ヒロシマ」に充てるという異例の形で出版され、即日30万部を売り切る大反響となった。

谷本は1948年9月から、エモリー大学とアメリカメソジスト教会外国伝道局の招請により渡米した。15カ月間に渡り31州256都市で講演を行ない、広島は惨状と平和を訴えるとともに、流川教会復興に奔走した。アメリカ上院で開会祈禱を行った。原爆投下から3年、『ヒロシマ』の出版から2年。「ヒロシマのタニモト」は、アメリカ国民にとって被爆者の代表的な存在だった。

この間、講演の合間に「ヒロシマ・ピース・センター」の計画を、多くの人に訴えた。これに深い興味を示したのが、「大地」の著者であり、ノーベル文学賞受賞者であるパール・バックだった。ジョン・ハーシーと同じく、アメリカ人宣教師の娘として中国で育

ち、社会活動でも名を馳せていた。

パール・バックの口添えで、知り合ったのが文芸雑誌『サタデー・レビュー』の編集長ノーマン・カズンズだった。加えてスタンレー・ハイ(『Readers Digest』編集長)、ハリー・カーン(『Newsweek』編集長)などのそうそうたるメンバーで、第1回の「ヒロシマ・ピース・センター協力会」組織委員会が開かれた。

しかし国内では、占領軍によるメディア統制(プレスコード)のために、原爆被害の実情も、谷本の活動もよく知られていなかった。国内のキリスト教関係者の中には彼のことを「原爆牧師」と非難する人もあった。

そうした中、1949年8月、広島市民にはほとんど知られないまま、広島城跡で「ヒロシマ・ピース・センター」の歙入式が行われた。アメリカ占領下の日本では、時期尚早でもあった。渡米中の谷本に代わって、シャベルを握ったのは長女の絃子だった。

谷本はノーマン・カズンズとともに、被爆した少女や孤児の救済活動として、原爆孤児の「精神養子」運動に取り組んだ。精神養子とは、アメリカ人が「精神親」となって養育費を送金し、原爆孤児を援助する活動である。谷本は、野宿する孤児を探してしばしば広島駅などを廻っていた。



ジョン・ハーシー 著「ヒロシマ」

ジョン・ハーシーとの出会い

1946年5月、ピューリッツァー賞作家でもあるジャーナリストのジョン・ハーシーが広島を訪れ、原爆被害の様子取材した。谷本も取材を受けた中の一人だった。

ハーシーが訪ねたときは、谷本は不在だった。次の日も予定があったため、「あの日」のことを手紙に書き記した。執筆作業は深夜にまで及び、枚数は便せん30枚にもなった。その2日後、初めてハーシーと対面。谷本の手記に感銘を受けたハーシーは「原子爆弾の科学的な被害報告ではなく、人道主義的な立場から書きたい」と語ったという。

『ヒロシマ』で谷本のことを知った人たちから、メソジスト教会を経由し、あるいは個人として直接に、援助の物資や寄付金が届くようになった。

『ヒロシマ』の反響をうけて日本語訳の話が持ち上がり、渡米直前の谷本が1948年に訳稿を仕上げた。これを石川欣一が修正して、1949年に法政大学出版局が刊行した。

「精神養子」縁組

「アメリカ人の手で原爆孤児を救い、ヒロシマの実態を海外に伝えよう」と、パール・バックが主として「ヒロシマ・ピース・センター協力会」が提唱したのがきっかけだった。

「精神養子」とは原爆で身寄りを失った子どもたちの養育をアメリカ人家庭が手助けする「親子縁組」のことで、当時のアメリカでは、日本人の帰化や移民を禁じており、日本人の子どもとの法的な縁組は認められなかった。

縁組あっせん、資金集め、送金を担当したのはアメリカの「ヒロシマ・ピース・センター協力会」だった。谷本清が渡米し、被爆者として広島は惨状を訴えたのを機に、ニューヨークで発足した。

「原爆乙女」の治療

「ヒロシマ・ピース・センター」が設立された1950年8月の1カ月後、ノーマン・カズンズの提案で、資金を得るために、第2回目のアメリカ講演旅行に出かけた。

講演は8カ月、201都市に及んだ。1951年2月5日には、満場の上院議員を前に、谷本は開会の祈禱を捧げた。ジョン・ハーシーによると、この瞬間が谷本の人生のハイライトだったという。

2度目の講演旅行中、谷本の心の中にあったのは、原爆孤児とケロイドを負った少女たちのことだった。谷本は以前から、ケロイドを負った女性にアメリカで整形手術を受けさせることを提案していた。原爆孤児には同情的だったアメリカ国民も「原爆乙女」には消極的だった。

3回目の渡米は1955年だった。5月5日、後遺症となったケロイドに苦しむ「原爆乙女」25人の治療のためアメリカに出発した。

人選は一苦労だった。選出しても女性側から断られることもあつ

た。「娘をこんなにした敵国に、手術に行かせるとは何事か」と拒否するのである。

ニューヨークに到着すると、谷本はノーマン・カズンズから「2人の乙女を連れて、ハリウッドで簡単なインタビューを受けるように」と言われた。それは「This is Your Life (これがあなたの人生だ)」というテレビ番組への出演だった。

その番組には、谷本のアメリカ留学時代の恩師のほか、「エノラ・ゲイ」号の副操縦士、さらには日本から秘密裏に来た谷本の妻や子どもたちも出演した。この出演によって、多くの寄付金を集めることができた。5万ドルを超えたという。

25人の「原爆乙女」たちは、ニューヨーク市のマウントサイナイ病院で治療のための手術を受けた。「原爆乙女」は英語で「ヒロシマ・メイデン (Hiroshima Maidens)」と呼ばれた。「原爆乙女」たちは人目にさらされながら、手術中のミスにより渡米した「原爆乙女」のひとりだけが亡くなったものの、原爆の悲惨さについて、身をもって世界中に問いかけ広めた。



「This is Your Life (これがあなたの人生だ)」

アメリカNBCで放映されたテレビ番組のタイトルである。毎回、あるひとりにスポットをあてて、その人物の関係者をスタジオに呼んで、番組を進めていく。1955年、谷本清が出演した際には、妻のチサのほか、長女の絃子(当時10歳)、長男の建(同7歳)、そして4歳と2歳の4人の子どもたちも、日本から急ぎよ渡米した。番組が始まるまで、谷本に見つからないようにホテルに缶詰めだったという。

この番組には、「エノラ・ゲイ」号の副操縦士だったキャプテン・ルイスも登場した。番組の中でルイスは「おお神よ。私たちは何と何をしたのか(My God, What have we done?)。そう思い、すぐにこの言葉を飛行日誌に書きました」と述べ、言葉を詰まらせた。その後、ルイスと谷本は固く握手を交わした。

晩年の谷本清

その後、谷本は1975年に80日間、4回目の渡米を行った。その間に148回の講演を行った。そして1982年、谷本は流川教会牧師を退任し、同時に名誉牧師の称号を授与された。広島市の外郭団体であった「広島平和文化センター」の理事長も務めた。

1985年、ジョン・ハーシーは40年ぶりに日本を訪れ、谷本もハーシーからの取材を受けた。その内容は「ニューヨーカー」に掲載、日本では「ヒロシマ その後」のタイトルが付けられ、1946年の『ヒロシマ』に追加する形で出版された。

その翌年の1986年9月28日午前5時56分。谷本は77歳でその生涯を終えた。生前の功績をたたえ、故人としては異例だが、エモリー大学から名誉神学博士の称号を授与された。その式典には第39代アメリカ合衆国大統領ジミー・カーターも参列していた。

死去の翌年の1987年にはヒロシマ・ピース・センターによって「谷本清平和賞」が創設された。谷本と親交のあった平和運動家のノーマン・カズンズが第一回の受賞者となった。そのノーマン・カズンズは生前、谷本の長女である絃子に対して、次のように語っていたという。「あなたのお父さんに出会わなかったら、私はヒロシマのためにこんなに多くの仕事はできなかっただろう」。谷本に対する最大の褒め言葉でもある。



広島平和文化センター

広島市長の山田節男の構想に基づき、1967年10月に広島市の一部局として発足したのが、その始まりである。だが、これに先行する構想として、広島流川教会の牧師であった谷本清の「ヒロシマ・ピース・センター」があった。

この構想は、被爆者治療を目的とする病院や被爆被害の研究機関、これに付属する展示施設、世界の平和問題を研究する研究機関を設けるといったものだった。これは後に、広島赤十字・原爆病院や放射線影響研究所、広島平和記念資料館、広島大学平和科学研究センター、広島市立大学広島平和研究所、広島平和文化センターなどにつながる。

1976年、財団法人広島平和文化センターとなり、1998年、財団法人広島市国際交流協会と統合し、新しい組織の「財団法人広島平和文化センター」として発足した。



谷本建さん

※注釈
年表、本文、コラムを作成するために、谷本清氏の長女・近藤絃子さんと長男の谷本建さんに取材しました。また「広島原爆とアメリカ人—ある牧師の平和行脚」(谷本清著)と「ヒロシマ、60年の記憶」(近藤絃子著)、「ヒロシマ・増補版」(ジョン・ハーシー著)の3冊、さらには中国新聞の関連紙面も参考にしました。また、アメリカNBCで1955年に放映された「Kiyoshi Tanimoto - This is your life-」に関しても、YouTubeで鑑賞しました。なお、本文・年表では、すべて敬称を省かせていただきました。

第1回 ・ **ノーマン・カズンズ 氏** 米国・カリフォルニア大学教授・平和運動家

米国ニューヨークの文芸雑誌「サタデー・レビュー」の編集長時代に渡米中の谷本清牧師と知り合い、ヒロシマ・ピース・センターの設立に関わった。さらに広島原爆被災の惨状をルポし「4年後のヒロシマ」として発表するなど、原爆孤児の精神養子運動や被爆女性の米国でのケロイド治療に尽力した。編集長を退いた後もカリフォルニア大学医学部教授の傍ら核兵器廃絶運動などで活躍し、人間愛と世界平和に多大なる貢献をした。1964年に広島市特別名誉市民の称号が贈られ、2003年8月、広島市の平和記念公園に氏の記念碑が建立された。 1990年11月 逝去

第2回 ・ **フロイド・シュモール 氏** 米国・森林学者・平和運動家

平和主義を信奉するクエーカー教徒。第一次世界大戦で参戦を拒否し、第二次世界大戦中はワシントン大学の森林学講師の職を辞し強制収容された日系人を援助、ユダヤ人救済活動に携わった。戦後は廃墟の広島で被災者のために「ヒロシマの家」を建てるなど平和運動に生涯を捧げ、105歳で亡くなった。「ヒロシマの家」は1949年から1952年まで広島市内に合計15棟(21戸)が建設された。現存する最後の1戸が広島平和記念資料館の付属展示施設「シュモールハウス」として保存されている。1983年、広島市から特別名誉市民の称号を贈られた。 2001年4月 逝去

第3回 ・ **栗原 貞子 氏**※ 詩人・原爆詩「生ましめんかな」の作者

爆心地から4キロ北の広島市祇園町(現安佐南区長東)の自宅で被爆。戦後、被爆体験をもとに、人間愛に徹しながら反核・反戦・平和をモチーフに数多くの詩作に取り組み、平和の尊さを訴えた。なかでも「生ましめんかな」は、被爆直後の廃墟の中で生まれた赤ちゃんに人間のたくましさ、未来への希望を見出した代表作として、英語、ドイツ語、スペイン語などにも訳された。詩作だけでなく、日本の戦争責任や旧ソ連のチェルノブイリ原発事故、セミパラチンスク核実験場など地球規模で広がる放射能汚染について積極的に発言するなど反核・平和の信念を貫いた。 2005年3月 逝去

第4回 ・ **森瀧 市郎 氏**※ 広島大学名誉教授・平和運動家

広島高等師範学校(現広島大学)の教官として動員学徒を引率中、爆心地から4キロ南の三菱重工広島造船所江波工場で被爆し右目を失明した。戦後は被爆者の救済活動や原水爆禁止運動の先頭に立ち、広島県並びに日本原水爆被害者団体協議会の結成をはじめ、原水爆禁止日本国民会議(原水禁)の代表委員を務めるなど、国民的な反核・平和運動をけん引した。世界で核実験が行われるたびに広島平和記念公園の原爆慰霊碑前で抗議の座り込みを行い、白髪を風になびかせて最前列に座る姿は、核のない世界平和を願うヒロシマ市民のシンボリックな存在であった。 1994年1月 逝去

第5回 ・ **今堀 誠二 氏** 広島大学名誉教授・平和思想家

中国近代史研究の傍ら、早くから原水爆禁止運動に関わり、運動の理論的指導者として原水禁世界大会のアピール起草づくりなどで活躍した。原水爆禁止運動の歴史を研究し「原水爆時代」(三一書房)を著したほか、広島・長崎の原爆被害の科学的実態調査を提言し、「広島・長崎の原爆災害」(岩波書店)の編集委員を務めるなど、ヒロシマの声を代表するオピニオンリーダーとして反核平和運動に大きな影響を与えた。勤務する広島大学においては、日本最初の平和学の学術的研究機関である平和科学研究センター(現広島大学平和センター)の設立に尽力した。 1992年10月 逝去



TABLET FOR PEACE

People of the world pray for the opportunity to live in peace.
The "TABLET FOR PEACE" represents this desire.
On the tablet the word "PEACE" is inscribed in 57 languages of the world.
The tablet was created by Hiroshima Peace Center in accord with the sentiments of Hiroshima, City of Peace.
We pray that you daily renew an oath to contribute to permanent world peace.
Hiroshima Peace Center



ヒロシマ・ピース・センター **谷本清平和賞選考基準** (2016年8月 整備)

前文

1945年8月6日、広島に世界初の原子爆弾が、続いて第2弾が8月9日長崎に投下されました。その後、激しい核兵器開発競争を繰り広げたアメリカと旧ソビエト連邦(現ロシア)の冷戦時代は終焉しましたが、その一方で核兵器保有国は、イギリス・フランス・中国・インド・パキスタンさらに保有疑惑数か国にも拡散し、かつ核兵器は小型化・軽量化・高性能化など技術的にも著しく進化しています。今なお世界には1万5千発を超える核兵器が存在すると推定され、これは地球人口70億余人を何度も減らすことのできる数といわれています。従って核兵器が存在すること自体が全人類の脅威であり、この脅威からの自由を獲得するために、人類はあらゆる努力を重ね平和を築いてゆかなければなりません。

現代に生きるわれわれの責務は、核兵器廃絶と世界平和実現を求めて小さなことでも自分がなうることを果たし、またこのことを次の世代に継承していくことです。

それは、まさしく「谷本清平和賞」の目的にほかなりません。

谷本清平和賞選考基準

谷本清牧師の平和・愛・奉仕の偉業を祈念して創設された「谷本清平和賞」の選考基準を下記のとおり定め、賞に該当する者を選考します。

記

1. 原爆被災者で、人間愛・平和のために奉仕した人
 2. 被爆の証言活動・宗教・文芸・教育・学術研究・医療・平和運動等を通して、平和に貢献した人または団体
- 付記:選考に際しては、上記のいずれかを満たすものとします。

平和の牌
世界中の人々が平和な社会を願い、幸福に生活することを望んでおります。この願いを「平和の牌」に託し、祈念するものです。この牌には、世界各国において公用語として使われている57の「平和」と言う言葉が打ち込まれています。平和都市広島を共にするヒロシマ・ピース・センターが作成しました。これを記念とし、世界の恒久平和への誓いを、日々新たにしていただければ幸いです。

第6回

・ 故 ジョン・ハーシー 氏

米国・報道作家・「ヒロシマ」の著者

第二次世界大戦中、従軍記者として各地を取材し、イタリア戦線をテーマにした「アダノの鐘」でピューリッツァー賞を受賞。1946年春、被爆後の広島を訪れ谷本清牧師ら被爆者6人を取材して米国の雑誌に「ヒロシマ」を掲載し、世界に被爆の惨状を伝えるルポとして大きな反響を呼び、「ノーマ・ヒロシマ」の平和運動の原点となった。その後も谷本牧師たちを再取材した「ヒロシマその後」を発表するなど、数々の作品を通じて平和の尊さと人類愛を訴え続けた。谷本清平和賞の授賞内定直後に死去し、授賞式には妻のバーバラさんと長女のブルックさんが出席した。 1993年3月 逝去

第7回

・ ヒロシマを語る会

原爆体験者の団体代表 原 廣司

「ヒロシマを語る会」は、1984年4月、「世界平和のため被爆の惨状を語り継ごう」と被爆者13人で結成した。前年に大阪市の高校生を対象に証言活動をしたのがきっかけだった。会員の学習会を開いて証言活動の充実を図ったりして修学旅行生や各種の団体に被爆体験を語り、平和の尊さを訴えた。韓国人被爆者らアジアの戦争被害者とも交流するなどして加害者の視点も取り入れた。谷本清平和賞授賞式で原代表は「会員も高齢化しているが、できるだけ活動を続けたい」と決意を新たにしていたが、高齢化や死亡により会員が減少し、2001年に解散した。 2019年4月 逝去

第8回

・ 金信煥（キムシンファン）氏

韓国・牧師・在韓被爆者救援活動家

愛知県豊橋市生まれで、1966年、在日大韓基督教広島教会へ主任担当牧師として赴任。原爆の後遺症に苦しむ韓国人を救うため、1984年から在韓被爆者渡日治療広島委員会代表幹事として、日本の医師団と韓国政府の間の橋渡しに奔走するとともに、日本政府にプロジェクトの拡大を訴えてきた。その結果、これまでに約300人の韓国人被爆者を日本に招くことができた。国家や宗教を超えた人類愛と平和を希求する心に根ざした活動に、多くの団体や個人、あるいは病院などの支援が寄せられ、在韓被爆者の渡日治療を推進する原動力となった。

第9回

・ 村井 志摩子 氏

劇作家・演出家・「広島的女上演委員会」創設

広島市中区出身で、原爆投下時は東京の大学に在学していた。ふるさと広島が一瞬にして廃墟と化し、多くの犠牲者を出したが、自身は被爆を免れたことに心を痛め、戦争の悲惨さと平和の尊さを、演劇を通して訴える使命に促され、「広島的女上演委員会」を創設。「広島的女・八月六日」「原爆ドーム、ヤン・レツル三部作」などの劇作、演出活動を国内外で行った。その創造的演劇活動は、原爆だけではなく、プラハ、チェルノブイリの悲劇をテーマとし、ヒューマンズムに基づく、反核、反戦、平和、情愛が醸し出されており、世界各地で感動を与えた。 2018年5月 逝去

第10回

・ 故江口 保 氏※

「ヒロシマ・ナガサキの修学旅行を手伝う会」主宰

母校の旧制長崎県立瓊浦中学校（現長崎西高）で助教として勤務中、被爆した。戦後上京し、上平井中学校などに勤務。原爆学習の重要性を説き、距離的に近い広島で25年間、修学旅行を実施した。学校や地域の原爆慰霊碑をまわり、被爆者の証言を聞く学習法は「上平井方式」として、全国的に知られた。定年前に退職して単身広島に下宿し、「ヒロシマ・ナガサキの修学旅行を手伝う会」を主宰。10年間で全国各地の延べ1,000校以上の小・中・高校の原爆学習を手伝った。谷本清平和賞授賞式の5か月前に急性骨髄性白血病などのため死去、式には妻の春子さんが出席した。 1998年6月 逝去

第11回

・ 伊藤 隆弘 氏

元舟入高校校長・原爆劇作家・演出家

広島市舟入高等学校の国語教諭として勤務を始めた1963年から33年間にわたり演劇部を指導。「ヒロシマ」をテーマに戦争の悲惨さと核のない世界平和の尊さを表現する創作劇活動に取り組んできた。岡山市生まれで被爆とは縁はなかったが、1945年6月の岡山上空襲の際に母親と逃げ回った体験を持ち、「戦争で本当に苦しむのは市民」との思いが原点にあった。被爆二世をテーマに初めて創作して以来、手掛けた原爆劇は30本。同校演劇部は全国高校演劇コンクールに11回出場して最優秀賞1回、優秀賞5回を受賞するなど全国に「原爆劇の舟入」の名を広めた。

第12回

・ ワールド・フレンドシップ・センター

海外との平和使節団交換代表 森下 弘

米国人の平和運動家で広島市の特別名誉市民である故バーバラ・レイノルズ氏の発意で広島市の外科医故原田東岷氏（ワールド・フレンドシップ・センター初代理事長）らとともに1965年、設立された。世界中から広島を訪れる人々に被爆証言を聞ける機会を提供し、人々が友情を築き、平和を促進する目的で、恒久平和実現のための活動を続けてきた。米国などとの平和使節団の交換やピースセミナーの実績、さらには広島を訪れる外国人に被爆の惨状を伝える平和交流、ピースガイドなどにより、原爆の風化を食い止めるのに大きな役割を果たしている。

第13回

・ 故河本 一郎 氏※

「広島折鶴の会」結成

南米ペルーのリマ生まれで、原爆投下時、広島市に隣接した坂町の発電所で働いていて、救援のため入市被爆した。戦後は「原爆の子の像」の建立や原爆ドームの保存運動などに関わった。1958年の像の完成を機に、「広島折鶴の会」を結成し、世話人として小・中・高校生たちと折り鶴を持って被爆者を慰問したり、「原爆の子の像」を訪問する世界各国の人を出迎えたりした。解体論議があった原爆ドームの保存運動にも子どもたちと取り組むなど72歳で亡くなるまで活動を続けた。死後に急きよ谷本清平和賞の授賞が決まり、告別式の霊前に賞状が飾られた。 2001年6月 逝去

第14回

・ 中沢 啓治 氏※

漫画家・「はだしのゲン」の作者

広島市舟入本町（現中区）出身で、国民学校1年の時、被爆した。爆心地から1.3キロの近さで、自身は建物の塀の影に入ったことで熱線を浴びず、奇跡的に助かったが、父や姉、末弟の3人を失い、原爆投下当日に生まれた妹も4か月半後に亡くなった。こうした被爆体験をもとに1973年、漫画「はだしのゲン」を発表した。戦争の惨たらしさと原爆の恐ろしさを実体験に基づいて描いた漫画は10言語以上に翻訳され、CDや映画化などによって世代を超え国境を越えて、争いのない地球を目指さなくてはいけないというメッセージを送り続けている。 2012年12月 逝去

第15回

・ 吉永 小百合 氏

女優・原爆詩朗読者

1945年、東京上空襲の三日後に東京で生まれた。被爆地広島を舞台にした映画「愛と死の記録」への出演やテレビドラマ・映画「夢千代日記」で胎内被爆し原爆症に苦しむ主人公を演じて、「原爆のむごさ、平和の尊さを伝えていきたい」との思いを強くした。以来、日本映画を代表する女優として活躍する傍ら、反戦・反核運動に積極的に関わってきた。なかでも原爆詩の朗読は、「国際平和年」だった86年、東京で開かれた反核集会で広島市の原爆詩人大平敦子さんの詩「慟哭（どうこく）」を朗読して以来、「一人の表現者として平和のためにできることを」と続けている。谷本清平和賞授賞式でも「世界平和弁論大会」に参加した留学生と一緒に原爆詩を朗読した。

1945年9月、朝鮮半島から一家で母親の故郷の広島市へ引き揚げ、被爆の惨状を目の当たりにした。中国新聞記者時代、新聞協会賞を受賞した「ヒロシマ二十年」企画報道を担当、さらに在韓被爆者問題も提起するなど被爆者救済、核兵器廃絶を世に問い続けた。1991年から2期8年務めた広島市長時代には8月6日の「平和宣言」で日本の戦争責任を指摘し、米国の「核の傘」からの脱却を説いた。また、広島市立大学内に平和研究所を創設した。市長退任後も、旧ソ連時代に核実験が繰り返されたカザフスタンや戦火に傷ついたカンボジアの人々への支援など、精力的に活動が続いている。

日本を代表する映画監督・脚本家の一人。表現の自由や思想の自由を追求し、100歳で死去するまで映画への情熱を燃やした。広島市郊外の石内村(現広島市佐伯区)の生まれで、広島原爆や戦争をテーマにした作品も多く手掛けた。なかでも映画「原爆の子」は戦後初めて原爆を直接取り上げた映画として世界で反響を呼び、チェコ国際映画祭平和賞、英国フィルムアカデミー国連賞、ポーランドジャーナリスト協会名誉賞など多くの賞を受けた。93歳で谷本清平和賞を受賞した際も、原爆爆発の瞬間を描く新作「ヒロシマ」の制作構想を披露し、核兵器廃絶、恒久平和実現への執念を見せた。

2012年5月 逝去

大学、中学高等学校、幼稚園を設置する広島で唯一のプロテスタント女子教育の総合学園として、多くの人材を輩出している。前身の広島女学会が誕生したのは1886年。キリスト教精神に基づいた平和主義、人間愛を伝える教育を実践し、この間幾多の困難を乗り越えてきた。特に広島原爆で一瞬にして全校舎が倒壊、焼失して生徒・学生330人、教職員20人が犠牲になった。戦後、学院一丸となって平和学習を推進し、中学入学時から原爆被爆を学び、ピースガイドや原爆朗読劇などに取り組んでいる。また同窓会も証言集「平和を祈る人たちへ」を出版して国内外に配布するなど、後世への継承に努めている。

在韓被爆者の渡日治療を支援しようと、1984年、内科医の故河村虎太郎氏ら広島市の医師たち23人が呼び掛けて結成した。全国からカンパを募って広島県内を中心に12病院が受け入れ、治療した。当初は年に30~40人を招いていたが、被爆者の高齢化や日本政府が2004年度から医療費の一部助成を始めたため年3人程度に減少。谷本清平和賞受賞を、河村虎太郎医師の息子が委員会会長の河村謙氏は「活動に光を当てていただきありがたい」と感謝した。委員会は2016年5月、国が在外被爆者の医療費の全額支給を始めたため役割を終え、活動を終了した。前年までの31年間に延べ572人を受け入れた。

爆心地から1.4キロの旧制広島中学校(現基町高校)で被爆した。1951年に市職員になり、1979年から4年間、原爆資料館長を務め、被爆資料の館外貸し出しや修学旅行生らへの証言活動など被爆の実相を国内外に発信した。2008年9月に広島市で開かれた主要国(G8)下院議長会議(議長サミット)でも、米国のペロシ下院議長ら各国議長に被爆体験を証言した。病身をおして核兵器廃絶と恒久平和実現へのメッセージを発信し続け、谷本清平和賞の受賞に「命ある限り、被爆者として体験を伝え続ける使命を果たしたい」と決意を新たにされた。

2011年11月 逝去

長崎原爆で母親が被爆し、翌年生まれた被爆二世。高校時代に同じ二世の友人が白血病で亡くなり、原爆の恐ろしさを知った。会社員を経て1979年から2007年まで長崎県の小学校に勤務。1986年に長崎県被爆二世教職員の会を設立し1988年には全国被爆二世教職員の会会長に就任した。1998年から2006年まで全国被爆二世団体連絡協議会会長も務めた。1998年に核兵器廃絶を求める署名を国連に届ける「高校生平和大使」を創設、2001年に始まった「高校生1万人署名活動」も支えている。「平和運動に若者の参加を」との思いが原動力となっている。

原爆によって親、あるいは子を失った人々の手記などを朗読劇にして公演している。1985年から原爆朗読劇「この子たちの夏」を続けた「地人会」が解散し、「どうしても継続していきたい」と2008年、女優18人で結成した。「夏の雲は忘れない ヒロシマ・ナガサキ 一九四五年」のタイトルで全国を巡回し、情感のこもった朗読に映像や音楽、効果音、照明が臨場感を高め、観客の胸を揺さぶった。谷本清平和賞授賞式にはメンバーの高田敏江さん、渡辺美佐子さん、日色ともみさんが出席して朗読を披露した。2019年、高齢化などで会の活動を終えたが、その志は次の世代の女優たちに引き継がれている。

広島に原爆が投下された8月6日朝、旧制広島高等工業学校(現広島大学工学部)に通学途中、爆心地から1.2キロの路上で被爆、顔や両腕に大やけどを負った。教職に就き、中学校校長を最後に1986年、定年退職し、被爆者運動に加わった。日本原水爆被害者団体協議会の代表委員や広島県原爆被害者団体協議会の理事長を務め、反核・平和運動をリード。谷本清平和賞授賞式で「人間の命が第一。だから人の命を奪う戦争、特に核兵器は絶対にいけない」と力強く訴えた。2016年5月、広島平和記念公園を訪れた米国のオバマ大統領と握手し、言葉を交わした。2018年、広島市から名誉市民の称号を贈られた。

2021年10月 逝去

8歳の時、爆心地から北東2.3キロの広島市牛田本町(現東区)にあった自宅近くで被爆した。医師になって1974年に東区で開業、市医師会長、広島県医師会会長を歴任して地域医療の充実に努めた。在外被爆者の医療にも積極的に取り組み、北米や南米在住の被爆者の現地健診に赴き、帰国治療を支えた。核戦争防止国際医師会議(IPPNW)日本支部長としてIPPNW世界大会の誘致にも尽力した。2012年8月、23年ぶりに広島で開催された同大会直前の5月、74歳で亡くなった。谷本清平和賞の授賞式には妻の周子さんが出席し「夫は地域医療の拡充と被爆者医療に一生をささげた。喜んでいるはず」と謝辞を述べた。

2012年5月 逝去

8歳の時、爆心地の北東2.4キロの広島市牛田本町(現東区)で被爆した。市職員だった小倉馨氏と結婚。原爆資料館長や広島平和文化センターの事務局を務めた夫の死後、平和貢献活動を始めた。1984年にボランティア団体「平和のためのヒロシマ通訳者グループ」(HIP)を設立し、広島を訪れる海外の平和運動家たちの通訳や調整などに当たっている。1987年、米国ニューヨークでの第1回核被害者世界大会に出席、2003年にはワシントンでのB29爆撃機エノラ・ゲイ展示関連行事に被爆者の通訳で参加するなど活動の場を広げた。谷本清平和賞を受賞して「これからもヒロシマを伝える担い手育成などに取り組む」と決意を述べた。

広島女学院に通っていた13歳の時に学徒動員され、爆心地から1.8キロ離れた二葉の里（現東区）の陸軍第二総軍司令部で被爆した。大学卒業後、留学先の米国で平和活動を開始し、結婚を機にカナダ・トロントへ移住してからも欧米や日本などで被爆体験を語り、反戦・反核を訴えてきた。特に国際平和会議等において国際社会の理解と賛同を期待して強くアピールし、日ごろも若い世代へ原爆被爆の伝承と平和教育の推進に尽力してきた。谷本清平和賞の受賞3年後の2017年12月、ノーベル平和賞授賞式で核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)の事務局長とともにメダルと賞状を受け取り、全世界に向け受賞講演を行った。

広島市長在任中、平和首長会議の会長として国内外の都市の加盟を推進した。また、2003年に核兵器廃絶を目指す行動指針「2020ビジョン」を発表し、核兵器禁止条約の締結に向け署名活動を始めるなどグローバルな視点で世界平和の実現に向け積極的に発信した。平和首長会議の前身は世界平和連帯都市市長会議で、1982年、当時の荒木武広島市長が米国ニューヨークの国連本部で開催された第2回国連軍縮特別総会において、世界の都市に「国境を越えて連帯し、共に核兵器廃絶への道を切り開こう」と呼び掛け、結成された。加盟都市は秋葉市長就任時の1999年に464だったのが、市長退任時の2011年には4,680と約10倍に増えた。

広島市南区出身の被爆二世で、両親ときょうだい3人が爆心地から約1.4キロで被爆した。1972年に米国人との結婚を機にハワイへ移住し、オバマ大統領も通ったプナホウ学園の日本語教師として勤務。30年かけて日本語の教科書(全5巻)を編さん、原爆も第4巻で取り上げた。その印税で「広島平和スカラシップ」が設けられ、2009年から毎夏、高校生2人と教師1人が広島市に派遣されている。2016年5月、オバマ大統領が広島を訪れた際には自らも広島を訪れ、県内の高校生たちと交流した。谷本清平和賞の受賞に「これからも平和を築き上げる人を育てることを使命に生きていく」と喜びを語った。

1967年に開館した。広島市安佐北区出身の画家丸木位里氏が、原爆投下の数日後に広島入りした体験をもとに妻で画家の俊氏と30年かけて共同制作した「原爆の図」を中心に所蔵、展示している。原爆による人間の惨状を描いた「原爆の図」は、国内のほか海外でも大きな反響を呼んだ。毎年8月6日は同館で「ひろしま忌」として平和を訴える集いを開催するなど、美術館活動を通じ核兵器廃絶と恒久平和の実現を発信し続けている。谷本清平和賞は美術館を運営する同名の公益財団法人に贈られた。授賞式には同法人の岡村幸宜専務理事が出席し「原爆の図は、若者たちに現代の理不尽さを気付かせる作品」と解説した。

谷本清平和賞の第4回受賞者である故森瀧市郎氏の次女。原爆投下前に広島県君田村(現三次市)に疎開して被爆を免れた。病気のため1996年に公立中学校の職員を退職し平和運動に携わった。核戦争危機にあったインド・パキスタンへ平和行脚を行い、放射線被曝の視点からウラン兵器禁止活動を主導した。さらに被爆70周年の2015年に広島で「核被害者フォーラム」を開催し、核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)と連携して核兵器禁止条約制定を訴えた。谷本清平和賞の授賞式で「核と人類は共存できない」と訴えてきた父の言葉や被爆地広島に生まれ育ったことが活動の原動力」と振り返った。

両親が広島で被爆した被爆二世。調律師として古いピアノを再生して福祉施設などに寄贈する活動をするうち、被爆ピアノと出合った。「被爆ピアノの音色を聞いてもらい、平和を考えるきっかけにしてほしい」。2001年から、被爆者や遺族から託された被爆ピアノを自ら4トトラックで運び、全国を巡回して演奏会を開いている。2017年にノルウェー・オスロであったノーベル平和賞の記念コンサートでも被爆ピアノが使われた。谷本清平和賞授賞式では爆心地から最も近い約1.5キロで残存したピアノによる演奏が披露された。2021年7月、広島市安佐南区の工房隣に被爆ピアノ資料館を建設した。次世代を担う子どもたちにもっと被爆ピアノに触れてほしいとの願いからだった。

米国ミシガン州生まれ。ニューヨーク州の大学で英米文学を学び、卒業と同時に1990年来日し、日本語での創作を始めた。米国のピキニ水爆実験で被爆したマグロ漁船「第五福竜丸」を扱った絵本で日本絵本賞を受賞するなど核や被爆問題に向き合ってきた。2011年に広島に移住して7年がかりで2019年に完成させたのが、紙芝居「ちっちゃい こえ」(童心社)。丸木位里、俊夫妻の大連作「原爆の図」を土台にした。自身にとって初の紙芝居で、「原爆の図」が巨大な紙芝居だとひらめいたのが制作のきっかけだった。谷本清平和賞授賞式で紙芝居を披露しながら、更なる創作意欲をかき立てた。

谷本清平和賞の受賞者・団体

第1回	1987年	ノーマン・カズンズ氏
第2回	1988年	フロイド・シュモー氏
第3回	1990年	栗原 貞子氏
第4回	1991年	森瀧 市郎氏
第5回	1992年	今堀 誠二氏
第6回	1994年	ジョン・ハーシー氏
第7回	1995年	ヒロシマを語る会
第8回	1996年	金 信煥氏
第9回	1997年	村井 志摩子氏
第10回	1998年	江口 保氏
第11回	1999年	伊藤 隆弘氏
第12回	2000年	ワールド・フレンドシップ・センター
第13回	2001年	河本 一郎氏
第14回	2002年	中沢 啓治氏
第15回	2003年	吉永 小百合氏
第16回	2004年	平岡 敬氏
第17回	2005年	新藤 兼人氏
第18回	2006年	学校法人広島女学院
第19回	2007年	在韓被爆者渡日治療広島委員会
第20回	2008年	高橋 昭博氏
第21回	2009年	平野 伸人氏
第22回	2010年	夏の会
第23回	2011年	坪井 直氏
第24回	2012年	碓井 静照氏
第25回	2013年	小倉 桂子氏
第26回	2014年	サーロー 節子氏
第27回	2015年	秋葉 忠利氏
第28回	2016年	ピーターソン ひろみ氏
第29回	2017年	公益財団法人原爆の図丸木美術館
第30回	2018年	森瀧 春子氏
第31回	2019年	矢川 光則氏
第32回	2020年	アーサー・ビナード氏

世界平和弁論大会

主催：公益財団法人ヒロシマ・ピース・センター 後援：中国新聞社・中国放送

目的 世界平和に対する関心を高め、平和への意識を高揚し啓発すること

二代目理事長 鶴 襄氏(学校法人鶴学園創立者)が、若人たちが世界平和に対する関心を高め、国境を越えて平和実現のために手をつないでほしいとの願いから、1990年に第1回「世界平和弁論大会」を開催しました。2019年の第30回までは続けて行われてきましたが、コロナウイルス感染症の拡大によって、留学生の来日も難しいなか、2020年と2021年の開催は中止となりました。

出場者募集要項

発表内容 世界平和に関するもので、提出したテーマと趣旨をもとに発表してください。

発表時間 一人5分程度

応募資格 広島県に在住する外国人留学生(大学院・大学・短大・高専・専修学校・高校・日本語学校に在学している者)

第1回 日本語による 世界平和弁論大会

第1回「日本語による世界平和弁論大会」が1990年12月2日に行われた。

発表者は、鄭向時さん(中国)・ロイ・デビカさん(インド)・

王志松さん(中国)・テイン・ルインさん(ミャンマー)の4名。

最優秀賞に輝いたのは、王志松さんで、王さんには、鶴襄理事長から

賞状と谷本清平和賞杯である「世界平和弁論大会最優秀賞杯」

並びに図書券(5万円)が贈られた。

ピースセンターだより1990年度 掲載

世界平和弁論大会最優秀賞の受賞者

第1回1990年	王 志松さん(中国)	第16回2005年	任 麗潔さん(中国)
第2回1991年	カン・ハサンさん(インド)	第17回2006年	ジャルワン・ティアンタンさん(タイ)
第3回1992年	アイリーン・チャ・ワン・ワイさん(マレーシア)	第18回2007年	エセシジャン・アイジャさん(カザフスタン)
第4回1993年	栄 勇さん(中国)	第19回2008年	スガンディ・バラスーリヤさん(スリランカ)
第5回1994年	アン・セシールさん(フランス)	第20回2009年	ルハムザヤ・エルデネバットさん(モンゴル)
第6回1995年	アリーン・チャルム・チャイキットさん(タイ)	第21回2010年	スルダナ・アディルハノワさん(カザフスタン)
第7回1996年	ハトリア・オメスさん(ベネズエラ)	第22回2011年	アシクバエワ・アイダナさん(カザフスタン)
第8回1997年	フルカット・フェイズさん(中国)	第23回2012年	スマイルカノワ・マディナさん(カザフスタン)
第9回1998年	アリソン・マクナマラさん(オーストラリア)	第24回2013年	サラ・バネリスさん(ドイツ)
第10回1999年	刘 艶さん(中国)	第25回2014年	任 欣雨さん(中国)
第11回2000年	リスキー・プトリさん(インドネシア)	第26回2015年	ノイバート・ユリアさん(ドイツ)
第12回2001年	ホアン・ペドロ・メンドーサさん(コロンビア)	第27回2016年	ウフナーロヴァー・ナミコさん(スロバキア)
第13回2002年	朴 紅梅さん(中国)	第28回2017年	フランシスカ・レベさん(チリ)
第14回2003年	ケリー・スミスさん(アメリカ)	第29回2018年	ナヴァルチーコヴァー ペトラさん(スロバキア)
第15回2004年	スヴァディー・チャラドルさん(タイ)	第30回2019年	カール ステファン カンテルスさん(スウェーデン)

